

スプーン一杯の幸福

森田カオル

スケソウダラの腹を捌いているので、鍋物の仕度をしているのかと思った。

「自家製のタラコを作るんです」

彼女は言った。

「市販のタラコは怖くて食べられないですよ？ だから自分で作るしかないんです」

彼女の話では、市販のタラコは、無着色のものでも発色剤が使われている。その発色剤は、かなり毒性が高いものだそうだ。

「でも、農水省が認めている添加物でしょ？」

しかし彼女は困惑した表情で言った。

「安全だから認めているとは限らないんです。語弊があるかも知れないけど、危険だと認めないから認可されているのだと思います」

彼女はそれから、私たちが日常食べている食品に用いられている添加物の具体例を挙げ、

その危険性を手短かに説明してくれた。

「うちの子、アトピーなんです。以前はひどかった。可能な限り添加物を排除した食事に変えてからですよ、今のようになんかきれいになったのは。薬はずっと同じのを処方されているのに、ですよ。こんなに劇的に効果があったのはうちの場合だけかもしれないけどね。ただでさえ薬という化学物質を取り込まなければならぬんです。それ以外の化学物質は、取らないに越したことは無い。これが我が家の家訓、とでも言うんでしょうかしら」

考えてみれば、市販の食品は添加物まみれである。それ無しに、今の日本の食はありえないといっても過言ではない。

「ばかばかしいと思われるかもしれませんが、あれが旨いの、これが珍しいのといって日本中を探し回るのに比べたら、どうということはないと思っています」

彼女は、わが子が口にする一匙に、その人生のすべてを注ぎ込んでいたのであった。

死の天使

森田カオル

——とうとうこんな田舎にまで、こんなものができたか。

定年間近の刑事が、店の前に佇み、呟いた。

所轄内の独居老人が、自宅や路上で突然、

認知症や痴呆症を発症、死亡に至る事例が頻

発した。事件性を考えた県警の調査により、

件の老人たちが発症する前に、ある店を訪れ

ているという共通点が浮かび上がったのだ。

彼は店の扉を開けた。相棒の刑事が一人、

先に店に入っているはずだ。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

濃紺のメイド装束に身を包んだ愛くるしい

娘が、老刑事を出迎えた。話には聞いていた

が、これがメイド喫茶か。東京ではだいぶ下

火になってきたらしいが。

五坪ほどの個室に通された。調度品も凝っ

たのを揃えている。店内のざわめきも聞こえない。話に聞くメイド喫茶とは趣が異なるようだ。先着しているはずの相棒も気になったが、まず、店の出方をみることにした。

給仕のメイド嬢が部屋に入ってくる度に、他愛のない話をしながら、手がかりを探ろうと試みた。だが、事件と関わりのある話はずいぶん聞き出せなかった。

ふと腕時計に目をやる。だいぶ長居をしたようだ。あまり収穫はなかったが、今日のところは引き揚げて、出直すしかない。

会計を済ませて店を出ようとすると、メイド嬢が何かを掌に乗せてきた。十センチ角ほどの白い箱で、赤いリボンが結んである。

「行ってらっしゃいませ、ご主人様。どうぞこ

れをお持ちください。疲れすぎて辛いとか、

切なくてやりきれないとか、そう感じた時に

開けてくださいませ」

「……これは、何かね」

「はい、メイドの土産です」

節制

森田カオル

体重税が導入された。

国民は挙って体重を落とそうと努め、メデアはさまざまなグイエット法の特集を組み、連日のように報じた。

人々の価値観も変化した。小柄で華奢が美德、巨漢と肥満は悪徳とされた。モテまくっていた長身男性はそっぽを向かれ、肥満体は人格さえ否定される始末である。

「国民の間に戸惑いは見られますが、総体的には健康増進に励んでおります」

厚生大臣が首相に言った。

「医療費が減少し保険の国庫負担が大幅に下がりました。生産性も向上しております」

「強行採決した甲斐があったね。だけど、行き過ぎたグイエットが心配だ。啓発活動も少かり頼むよ」

そうして法律施行後の初めの一年は好調に過ぎたかに見えた。

しかし人々の瘦身に対する意識もやがて薄れていった。その後、与党が選挙で負け、政権が交代すると、たちまちこの体重税は廃止となった。

反動で人々は太りまくった。糖尿病を始めさまざまな病がじわじわと国民に広がっていた。だが人々は再び痩せようとはしなかった。劇的な価値観の変化は、元の木阿弥という結果に終わった。

首相の座を追われた男は妻に聞いた。

「法案を通す前に、確か君は、法律が施行されても、長続きしないとやっていたね。君の予言どおりになった。何で、せっかく痩せたのに、皆また太ろうとするのだろうか」

少しふくよかな彼女はにこやかに答えた。

「だって人間は本質的に太るようになっていくんですもの。痩せるにはそれなりの大義名分が必要なのよ」

悪魔（白雪姫異聞3）

森田カオル

刺客から吉報を受けた妃は上機嫌で自室へ戻り、込み上げる笑いを堪えきれず、部屋中に高笑いを響き渡らせた。そして今日は、軽やかな口調で鏡にこう問いかけるのだった。

「鏡よ、世界中で一番美しいのは誰だい」

「それはお妃様、あなたでございます」

相変わらず品の無い口調で鏡が答える。最近ではこの後に「ですが、スニービツヒエンはあなたの百倍美しいでげす」と口上が付いたのだが、今日はそれがない。妃はますます高揚し、ついにオペラ『私が一番美しい』を夜中まで独りで演じるに至った。

しかし歓喜は長くは続かなかった。

ある朝、いつものように妃が鏡に向かって問いかけると、鏡はこう答えた。

「それはお妃様、あなたでございます。ですが、

森の奥のドワーフの家に居る七人のスニービツヒエンはあなたの百倍美しいでげす」

妃は耳を疑った。そして、混乱しそうな意識を集中させ、改めて問い直した。

「スニービツヒエンは、生きているのかい？
で、あの子は、何人居るって？」

「七人でげす」

妃は卒倒しかけ、混濁してゆく意識の中で辛うじて頭在意識に踏み留まった。

「ドワーフが七人ではないのか」

しかし鏡は躊躇なく答えた。

「いえ、ドワーフは一人。あなたの娘が七人」
普通の人間ならば恐慌を来していただろう。だが彼女を動かす行動原理は、非常にわかりやすい言動となって発現した。

「七人居ようが百人だろうが、根絶やしにしてくれるわ。今度は人は使わない。自らスニービツヒエンの息の根を止めてやる」

鏡は語らず、憎悪に燃える妃を映していた。

「きつと倒してやる、あの悪魔め！」

不幸な王子と小人たちの話

森田カオル

盲いた若者がドワーフの森に辿り着いた。

彼は塔に軟禁された少女との密通が露呈し、魔女に塔から突き落とされたのであった。

貴金属や宝飾品に精通したドワーフの意見では、何処かの王族の身なりだという。

スニーヴィッツヒェンは、大けがをしたドワーフの仲間と同様、若者を自分と同じ姿に変化させた。彼は視力を取り戻した。

「怪我が治っているのは、この姿になっている間だけです。元に戻れば怪我も元通り」

こうしてドワーフの家は、一人のドワーフ、七人のスニーヴィッツヒェン(姿の男)、それに、半妖魔の姿に戻ったスニーヴィッツヒェン(本人)の九人が共同生活を始めたのだった。

ある日、物売りの老婆に変装した妃が、娘を暗殺すべくこの家にやってきた、たまたま

応対したスニーヴィッツヒェン姿の王子は、毒リンゴを齧って呆気なく死んでしまった。

仕方なく弔いを行おうとしたその時、王子の亡骸が突如空中に舞いあがった。と同時に、スニーヴィッツヒェンの体から黒霧が噴き出し、王子を包む。稲妻が轟く。思わず身を伏せた一同の上から、女の声が響いた。

「我が名は、ナヴァ」

「ナヴァさん、お久し振りですう。私に吸収されちゃったのかと思ってたんですよ」

死んだばかりの王子の亡骸に憑代を移して、妖魔は復活を果たしたのだった。

「これより我とこの娘は、あの妃めとの決着をつけに、この男の故郷の王国で準備を整えようと思う。皆、世話になった。礼を申すぞ」

あっけにとられているドワーフと六人のスニーヴィッツヒェンを残し、二人は殊立った。

残された連中は口々に叫んだ。

「おい、この恰好のままじゃ、あの妃がまた殺しにやってくる。早く何とかしてくれ！」

星

森田カオル

子犬を拾った。

しかし自分のアパートでは飼えないので、
国の両親に相談すると、こっちで面倒見るか
ら連れて来いと言われた。

週末にわたしは久しぶりに帰郷した。在来
線で二時間もあれば帰れるくせに、わけあつ
て足が遠のいていたのだ。

両親とも犬は好きだが、最後に飼っていた
のが死んでから、実家ではかれこれ十年は犬
のいない生活が続いていた。

一晩泊まって都会での仕事に戻った。

火曜の晩に母から電話が来た。犬が夜鳴き
をするというのだ。母は何のつもりか犬を電
話口に連れてきて、わたしの声を聞かせた。

翌水曜の晩にまた電話があった。昨晩は夜鳴
きをしなかったというのだ。

「お前になつているみたいなんだよ。また今
週末来てくれない？」

その後の実験で、わたしの声を聴かせなか
った晩は夜鳴きをするのだ、と父が言った。

わたしは悩んだ末、それまでの勤めを辞め、
実家に戻り再就職をすることにした。結婚に
失敗した四十路間近の娘が戻ってきたとい
うのに、意外にも両親は喜んでくれるようだった。
それは、家に入ってくれるとばかり思ってい
た弟夫婦が、向こうの里での同居を始めてし
まったという寂しさもあったのだろう。

子犬のおかげでわたしの人生は思いもかけ
ない方向へ針路を変えてしまった。けれど、
この子を連れて夜の散歩に出ると、なぜか心
の底が温かくなる。

民家も疎らな農村の夜空は、天の川の星の
一粒まで見えるようだ。

子犬は甘えてわたしの足にじゃれてくる。
都会の暮らしに戻るつもりは、もうなくな
っていた。

変身

森田カオル

朝のニュースがテレビから流れている。行方不明の女子高生の事件がトップだった。半分寝ぼけたまま洗面所に立つと、鏡の中の自分の頭のあたりが、ちよつと不自然に変形していた。触ってみると、硬く尖った物体が生えている。眼鏡をかけなおして見てみる。

角、なのか？

玄関の呼び鈴が鳴る。近所に住む友人、タケトの声がする。ドアを開けると、珍しく頭にバンダナを被ったタケトが立っていた。

彼は私の頭を見るなり、あっ、と小さく叫び、慌てて玄関に入りドアを閉めた。

「お前もか」

そういってバンダナをとると、いつもの茶髪の旋毛のあたりに、まるでモヒカン刈りのような赤い突起物が見えた。

「お前、昨夜何食った？」

「牛丼」

「俺は焼き鳥だ。昨夜ナオトと焼き鳥屋で一杯やったんだけど、今朝メール来て、あいつ豚の尻尾が生えてたって。あいつは鶏嫌いで焼きトンばかり食ってたからな」

どうやら、直前に食べた動物の形質が発現しているらしい。俺たち四人の間は先週、バイトで新薬の臨床実験のドナーをしたのだが、思い当たる原因はそれしかなかった。

残る一人の間、コージに電話をかけた。彼はタケトのアパートへ向かっていたが、こっちに来るといふ。

間もなく、これも珍しくサングラスにマスクをかけたコージが現れたが、何か顔全体がいつもと違っている。サングラスをとると、彼は女のような顔になっていた。

テレビには行方不明の女子高生の顔写真が映し出された。今、目の前に、その顔にそっくりのコージが立っている。

遺産

森田カオル

「じいちゃんとはあちゃんの馴れ初め?」

ヒロコ伯母に言われて、俺はコップを落としそうになった。

祖父は、仏壇の白い骨箱に入って、祖母の真新しい位牌と並んでいる。

葬儀は昨日終わったが、納骨は明後日の予定だ。葬儀に来られなかった弔問客を、先ほど見送って一息ついたばかりだった。

「ばあちゃんと仲の良かった佐野のお婆さんが言っていたのよ。じいちゃん、結婚の時に言っていた通りに亡くなったって」

伯母の話では、祖父は特攻隊員だったが、終戦の日の後に出撃予定だったため生き延びた。しかし祖母の家は空襲で全滅し、祖母は天涯孤独になった。祖母に思いを寄せていた祖父は結婚前提でこの家に祖母を住まわせ、

半年後に無事に入籍したそうだ。

「その時に、俺はお前を絶対一人にしない。お前が死ぬまで死なないって誓ったんだって」

祖母はヒロコ伯母と俺の父を産んだのち体を壊し、五十年も寝起きを繰り返していた。

俺は床に臥せていた祖母の姿しか知らない。

「ばあちゃんが死んで三月も経たないうちに死んでしまうなんて運命かしらね、って皆言うけど、違う。ばあちゃんがいなかったら、じいちゃんもとっくに死んでいたと思う」

伯母が俺と二人の時にこんな話をしたのは、俺が去年結婚したばかりで、春には子供も産まれるからかもしれない。伯母も夫婦仲は良かったが伯父は癌で早世している。俺の従姉のナホコさんは出戻りで、今伯母と同居している。俺の心配をしてきているのだろう。

伯母に言われるまでもなく、俺には分かっていた。俺にはじいちゃんとはあちゃんの血が流れている。そして一緒に暮らしてきたんだ。だから心配しなくていいよ。

最後の審判

森田カオル

——昔々、美しく成長した我が娘を嫉んで、殺そうとした妃がいたの。しかし姫はその手を逃れ、魔界の者の力を借りて生き延びることができたのよ。

やがて七人のドワーフ達と助け合って平和に暮らしていたけど、妃はそれを見つけ出し、またもや娘を亡き者にしようと、いろいろな手を使ってきたのよ。

「それで、お姫様はどうなったの？」

——目の見えない王子が身代わりとなり、またもや逃れることのできた姫は、妖魔の力を借りて、妃に復讐をしたの。

「自分の母親を殺してしまったの？」

——昔の童話なら、地獄のような苦しみを与えて殺したでしょうね。あるいは、今の童話のようだったら、寛大な心を持って罪を許し、

平和に暮らしたかも知れないわね。

でも、姫と妖魔がとった方法は、そんなのとは違っていたの。

王子の姿を借りて国に入った妖魔と姫は、二人の婚礼という触れ込みで、姫の母へ使いを送ったの。妃は他国へ嫁いだ娘をどうすることもできないけど、やっぱり気になって、その国へやってきたの。

でもそこで待っていたのは、妃と同じ顔をした城の人々でした。自分が一番美しくないと気の済まぬ妃は、周りがみな自分と同じなので、自分の存在意義を失ってしまったわ。慌てて自分の国へ逃げ帰った妃を待っていたのは、妃と同じ顔と姿の家来達だったの。王妃は気が狂い、姿をくらませてしまったわ。

「まあ、恐ろしい。それで、お姫様は？」

——ほっほっ……。どうしているかしらねえ。

少女と話す老婆の髪は、歳に似合わず豊かに黒々としていた。その傍らでは、紅蓮の髪と黒い肌をした女が微笑みを浮かべていた。

小さい世界

森田カオル

「あたしはこれでいいの」

俺の頭を胸に抱きながら、女は答えた。張りのある乳房には汗が滲んでいる。

俺は女の腰を右腕で抱き、左手は彼女の髪を撫でるともなく撫でていた。

彼女と寝るのは二回目だった。チカという绰名とメアドの他は何も知らない。彼女も俺の本名は知らない。

場末のホテルの部屋は独特の消毒剤の臭いがしていたが、寝具は柔らかで暖かだった。「一回きりのつもりだったんだけどね、なんか、またヒロと会いたくなっただ。次があるかどうかは、わかんないけど」

俺も同じだった。サイトで知り合って一夜限りの恋に落ちる。朝が来たらさよなら、もう二度と会うこともない。でも、彼女は次

の週末に再び連絡してきた。俺の方は彼女の連絡先のデータは消しておいたのだが。

「ヒロは、特定の女と付き合うのはいやだって言ったよね。寝るだけの関係だとしても。あたしもそう。『付き合う』のはいや。でも、抱き合うのは、好きなんだ」

銜いもなくそう言っつて、シャワーを浴びたばかりの俺の胸を唇で吸い始めた。

彼女の過去は聞くつもりもない。聞かないのが礼儀だ。でも、俺も彼女も、心の底の方に落ちていく（もの）を互いに見出していた。気のせいと言われるかもしれないが。

言葉ではなくても、指使い、唇の重ね方で、自分と同じ（臭い）を嗅ぎ分けているのだから。そして安心する。彼女の肉体と座標が重なっている時に、俺は皮膚感とも気配ともつかない表現不可能な感覚を覚えた。

彼女は俺の全身を唇で愛撫する。俺も応える。愛や恋とは異なる愛おしさが、ここにはある。泡沫のようではあるが。

連作短説「グランアルカナ」0

続・粗忽の使者

森田カオル

——おい、松っあん。松っあんよお、皆、心配してたんぞ。とりあえず、無事なんだな。

よかったよお。

肝潰しちまったよお、お前さんの事でっつって鎌倉警察から電話がかかってきた時はよ。またこないだみてえに向島と間違えて小笠原の……。あ、悪い悪い、こいつあ言わねえ約束だったな。

話は戻るけど、何だってこんな雪っ降りの寒い日にこんな所……つつうとこの辺りの人には悪いけど、お前さんの住まいでもねえ所でお巡りさんの厄介になんかなってんのさ。

それよりさあ、あん時お前さん何で姿くらましまったのさ。あれからすぐここへ来たってえのかい。あん時って、ほら、昨夜だよ。仕事の納会で皆で居酒屋で飲んで外に出た時

だよ。お前さん、二次会に行くって盛り上がってたくせに、何か急に駆け出してどっか消えちまっただろ。ユリちゃんなんか心配で心配で、カラオケだって一曲も歌ってなかったんだから。なあ、ユリちゃん。

何だって。ユリちゃんに頼まれた？ ……頼んでねえってさ。本人が言っただから間違いないだろ。皆で雪道を歩ってる時だっ？ 俺も一緒に居たけど、本人も言ってるどおり、何も松っあんに頼んでなんかなかったぞ。

そう言やあ確かあん時、ユリちゃん何か言っただな。そうそう、もうそこいらへん雪で真っ白になっただ、それ見て盛り上がりたんだよな。

「だ、い、ぶ、つ、も、つ、て、き、た、ら、遊、び、た、い、わ、ね、わ、た、し、か、ま、く、ら、が、好、き、な、の」

……松っあん、どうしたんだよ。何で泣いてんだよ。わけを言えよ。ほら、泣いてちやわかんねえよ。